

## 知恵ある人の教えは命の“いずみ”である。(箴言13章14節)

編集：愛宕町教会・総務部 発行者：北 紀吉 発行所：甲府市北口3-4-23 日本基督教団愛宕町教会 TEL 055-253-3150 URL <http://www.geocities.jp/atagomachikyokai/>

### みことは

## 百人隊長の信仰

聖書 ルカによる福音書 第七章一〜十節

牧師 北 紀吉

イエスは、民衆にこれらの言葉をすべて話し終えてから、カファルナウムに入られた。ところで、ある百人隊長に重んじられている部下が、病気で死にかかっていた。イエスのことを聞いた百人隊長は、ユダヤ人の長老たちを使いによつて、部下を助けに来てくださるよう頼んだ。長老たちはイエスのもとに来て、熱心に願った。「あの方は、そうしていただくにふさわしい人です。わたしたちユダヤ人を愛して、自ら会堂を建ててくれたのです。」そこで、イエスは一緒に出かけられた。ところが、その家からほど遠からぬ所で来たとき、百人隊長は友達を使いによつて言わせた。「主よ、御足労には及びません。わたしはあなたを自分の屋根の下にお迎えできるような者ではありません。ですから、わたしの方からお伺いするのさえふさわしくないとおっしゃいました。ひとやおっしゃってください。そして、わたしの僕をいやしてください。わたしも権威の下に置かれている者ですが、わたしの下には兵隊があり、一人に『行け』と言えば行きますし、他の一人に『来い』と言えば来ます。また部下に『これをしろ』と言えば、そのとおりにします。」イエスはこれを聞いて感心し、従っていた群衆の方を振り向いて言われた。「言っておくが、イスラエルの中でさえ、わたしはこれほどの信仰を見たことがない。」使いに行つた人たちが家に帰つてみると、その部下は元気になつて

主イエスが、群衆に御言葉を語つてくださったつてカファルナウムへと入られると、ユダヤ人の長老たちが主イエスのところへとやつて来ました。長老たちは頼まれてやつて来たのです。誰に何を頼まれたのかと言いますと、百人隊長に、百人隊長の重んじている部下を助けてほしいと頼まれたのです。百人隊長の依頼を受けてユダヤ人の長老が行動を起こすということは異例のことです。

と言いますのは、百人隊長といえ、ユダヤを支配していますローマの軍隊の下士官です。独立を願うユダヤ人たちにとつて征服者の手先であり、ユダヤ人が実際にローマの支配を目の当たりにするのが百人隊長ですから、ローマ帝国そのものと言えます。それだけではありません。ローマは、征服した民に納税と徴兵の任を負わせました。しかし、ユダヤ人たちは独立の志が高く、しばしば独立運動を起し、謀反を企てたので、ユダヤ人たちには兵役の義務は負わせませんでした。ですから、百人隊長は必ず、異邦人、また異教徒です。そんなローマの権

力そのものである百人隊長、しかも異邦人である百人隊長とは、通常親しくはしないのです。いいえ、本来ならば憎しみを覚える相手なのです。

それなのに、ユダヤ人の長老たちが百人隊長の願いを聞いて主イエスのところに来るのです。どうして来るのか、その理由を彼らは主に語ります。「あの方は、そうしていただくのにふさわしい人です。わたしたちユダヤ人を愛して、自ら会堂を建ててくれたのです」と。この百人隊長は、なんとユダヤ人たちのために会堂までも建ててくれた、ユダヤ人にとつては恩人にも当たる人だと言うのです。ですから、神の憐れみを受けるに相応しいと言うのです。百人隊長の願いは、ユダヤ人の恩人として聞き入れられるべきとまで言うのですから、ユダヤ人たちにとつて如何に尊敬されていたかが分かります。

主イエスは、長老たちと一緒に百人隊長の家へと出かけられます。家へ向かっているとの知らせを百人隊長は受けたのでしよう。主イエスのところに友人たちを使いによつて言うのです。「主よ、御足労には及びません。わたしはあなたを自分の屋根の下にお迎えできるような者ではありません。ですから、わたしの方からお伺いするのさえふさわしくないとおっしゃいました」と。百人隊長は、自分が主イエスの前に進み出て願ひ事をするのに相応しくないと知つ

ているからこそ、ユダヤ人の長老たちにお願ひしたのです。決して自らの権力を傘に着てではなかつたのです。その謙虚さ、敬虔さが長老たちへの依頼となつたのです。

百人隊長は知つていたので、神を畏敬する者として礼拝を守り、礼拝のためになしうる献げものをしつとも、尚ユダヤ教に改宗できない自分の弱さ（そうすれば職を失います）を。自らが罪に過ぎず全く神に相応しい者ではないということ。まさに、主の前に自分が「相応しくないと」の言葉こそ彼の信仰告白なのです。罪人として神の御子主イエス・キリストに相応しくないと自覚こそ、何よりも神を大きく表す信仰の告白に他ならないのです。

そして、と言うのです。この世の権威に服する者として「ひととおっしゃってください」と。この世の権威に優る神の権威なる主イエスの、力なる御言葉を一言いただければ十分なのです。罪人ゆえに知つて居るのです。神の憐れみなくして済まされなことを。彼こそ、何処までも神を神とし、神の恵みを何処までも神の恵みとして表す者なのです。主の御言葉に百人隊長の部下は癒されました。

主は言われます「言っておくが、イスラエルの中でさえ、わたしはこれほどの信仰を見たことがない」と。

受洗にあたって

# 信 仰 告 白

## 信 仰 告 白



吉見 玲輝

わたしが、なぜ教会に来たかと言うと、お母さんが「たまきもいっしょに行こうよ」と言ったからです。

わたしが、つづけて行きたいなど思ったのは、子どものクリスマス祝会のケーキのかざりがとても楽しみだったからです。そのころ、わたしは五歳でした。

クリスマス会のときまでは、教会は何をするところなのか知りませんでした。でも、一年がたつて一年生になる前に、わたしは教会や神さまが何なのか、すこしわかりました。

去年、ひいおばあちゃんが亡くなって、わたしは、お母さんに「死んだらどうなるの?」と聞きました。そうしたら、お母

さんが「洗礼を受けるとだいじょうぶだよ」と言いました。その時に、お母さんの言葉を聞いて、洗礼を受けたいと思うようになりました。でも、受けなかったけど、はずかしくて言えませんでした。

今年になって、だんだん受けようという気持ちが強くなりました。

今では、神さまとイエスさまがわたしの救い主です。

(二〇〇八年十二月二一日、  
クリスマス礼拝にて受洗)



hanamizuki

## 信 仰 告 白



小林 郷志

私は小学校五年生の時、自宅近くにあった教会の教会学校に週一度通っていました。私の学校の成績を心配した母が探してくれました。勉強をし、そこに集う多くの仲間達と話をしたり、シスター達と歌を歌ったりしながら楽しいひと時を過ごしました。また祈りや讃美歌にもふれる事ができました。そこには神様を意識した日々がありました。

私が小学校六年生になって母が病気に倒れ、病院に入退院を繰り返していましたが、約一年の闘病生活の末、この世を去りました。深い悲しみに包まれ、途方に暮れていた私。母を奪った神に憎しみを抱くようになりました。「神様はこの世にいない!」その存在を否定するようになり、これまで生きてきました。

私は現在、薬物依存症という病気でリハビリ施設に入寮し、そこで生活しています。この病

気はとてもやっかいで、薬物を止めたくても止められず、それを放置しておけば進行し最終的には死に至る場合もあります。これまで多くの仲間が自らの手で尊い命を断ちました。本人の意志や愛情では治すことのできない難しい病気です。

私はこれまで、この病気によって多くの人達を傷つけ苦しめてきました。薬を得るために人を騙したり、嘘をついたりしてきたのです。良心の呵責にさいなまれ、それから逃れるためにまた薬を使うという悪循環に陥っていました。

私はリハビリ施設でのプログラムを通して、数年前から信仰を求めたいと思うようになりました。リハビリ施設はイエス様を信じる多くの信徒さん達に支えられています。そのお陰で私達は日々平安に暮らすことができています。

身も心もボロボロになっていく私達に神様はへりくだり、周囲の方々を介して救いの手を差し伸べて下さっているのです。私は罪人として生き、病人として生きます。そこには神様のあわれみがあり、救いがあるからです。私はこれから愛なる神様に全てを委ね、その道を歩んで行きたいと思っています。

(二〇〇九年四月二一日、  
イースター礼拝にて受洗)

## 信 仰 告 白



弓田 美希

私がどうして洗礼を受けようとおもったかという、前に優ちゃん、ゆうき君、としあき君、たまきちゃんが洗礼を受けたのを見て、「私もいつか洗礼を受けたいな」と思ったからです。そして今年、イースターを迎えたら洗礼を受けようと思いました。また、聖書のかしよでも復活のところが一番好きなので、イースターに洗礼を受けようと思いました。

私は小さい頃から教会にかよっていました。毎週日曜日はCSに出て、分級をし終わったらみんなと遊んで、昼食をとって、また遊んで、それが日曜日でした。

けれど四年生になってから、子供クラブの行事や学校のクラブなどでCSにでられない日が増えてきてしまいました。しかしCSにでられない時には不思議と、三年生にはなかったこんな思いがしてきました。「今日はだれがどんな話をしたのだから

う」とか、「なんの讚美歌を歌ったんだろう」などの思いが湧いてきました。四年生のころから神様を意識しはじめたのではないかと思います。

私はこれからCSに出られなかった日は、大人の礼拝に出たいです。もちろんCSにでた日は礼拝にも出ようと思います。そしてイエス様を私の救い主として、教会をなるべく休まないようにしたいと思います。

(二〇〇九年四月十二日、  
イースター礼拝にて受洗)



◀洗礼式のととき

## 証詞・感話

2008年2月28日 祈禱会

証詞

いつも支え  
導いてくださる神



山縣 洋子

兄、末木仁美姉、曾根原郁子姉と一緒に受洗。また翌年一九八七年には次女知子が平塚恵美子姉、平塚愛実姉、平塚睦美姉、橋口智英兄、深見貴嘉子姉、幼児洗礼の宮沢和幸兄と受洗。これで主人の念願だったクリスチャンホームになりました。

求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる。

(マタイによる福音書七章七節)

今ふりかえると、私は「求めも、探しも、門をたたくこと」さえしなかったと思っています。

教会の周りをうろろろしていたら、すでに門は開きドアも開いていました。ノックもせずに断りも無く、そーっと入り込んでしまったような後ろめたさを今でも感じています。それまで求めようとも、探そうともしなかった私が、なぜか鈴木先生のお宅へ伺い、心の内を聞いて頂いたのはクリスマスの一週間ぐらい前のことでした。その時、いつまでも心開かない私を神様が導いて下さったのだと思います。主人と教会の方々の長い間の祈りがあったことも知りました。

二〇〇八年新年祈禱会に与えられた聖句は、

わたしたちは、与えられた恵みによって、それぞれ異なった賜物を持っていますから、預言の賜物を受けていれば、信仰に応じて預言し、奉仕の賜物を受けていれば、奉仕に専念しなさい。(ローマ信徒への手紙十二章六〜七節)

私には何も賜物がないので、自分出来ることは奉仕すること(ただ働くことで奉仕しよう)と思っています。しかし奉仕とはキリストを証しすること、主からいただいた恵(賜物)を感謝し、主により頼み、強くして頂くことと知り、自分本位の傲慢さを思いました。

また九月、主人の病氣(大腸癌)が見つかり、即入院、即手術となり、祈るしかありませんでした。奇しくも十二年前と同じ、二度目の手術のためもあり回復が芳しくなく、点滴ばかりの治療に痩せて行くのが目に見えて、不安になって来た頃、見舞いの方から戴いた御言葉は、

恐れることはない、わたしはあなたと共にいる神。たじろぐな、わたしはあなたの神。勢いを与えてあなたを助け／わたしの救いの右の手であなたを支える。(イザヤ書四一章十節)

私は一九四二(昭和一七)年、満州(現在の中国東北地方)で生まれました。三歳で終戦になり、母と兄弟三人と七五歳の祖母と五人で命から引き揚げてきました。父は終戦直前シベリアに抑留され、三年ほど過ぎてから無事帰国しました。当時の話を聞くにつけ、一人も欠けることなく帰れたこと、貧しいながらも家族がそろって暮らせたことは幸せだったと、平和の有り難さをしみじみと感じています。それから六〇有余年、現在無事年金も戴き、すでに両親もおりませんが当時の苦労話をもっと良く聞いておけば良かったと、この頃切に思います。

私が初めてキリスト教を知り教会へ行ったのは、結婚式のためでした。深く考えもせず、礼拝にもあまり出席することもなく過ごし、洗礼を受けたのはそれから二〇年後でした。一九八六年クリスマスに古屋律子姉妹と一緒にでした。

その前年一九八五年、長女佳子が雪江美仁兄、清藤淳

でした。  
次の日、病院に行つて聞いた言葉は「朝、おかゆが食べられたよ」。その後、徐々に快方に向かい、退院出来ました。ほんとうに感謝です。

どんな時も、わがままな自分勝手な思いでいる時も、また不安で心細い気持ちでいる時にも、神様はいつも共にいて支え、導き、はたらきかけてくださっていることを改めて教えられた一年でした。

与えられている恵を覚え感謝し、祈る日々でありたいと思います。

2008年4月24日 祈祷会

証詞

## みことばに生かされて



矢崎 幸枝

「証しをしてください」と言われた時は、瞬間「困ったことになった」、信仰厚い皆様の前で、つたないお話をするのは苦痛にも思いました。

でも、ふっと考えてみますと、生涯忘れることのできない経験をし、やっと普通の生活に戻って来ましてから二〇年経っていることに気がつきました。

今から思いますと「すべてが神様の御計画だった」と感謝あるのみですが、二〇数年前のことを思い起こす度に胸の痛みを憶えずにはいられません。お話を聞いていただき、また新たな信仰の第一歩とするためにもお受けさせていただきました。

さて、私は信仰を持つ前は教会や聖書とはほとんどかわりない生活でした。結婚前の家庭では、母の姉がクリスチャンだったこともあり、母の言動や、クリスマス

の時の聖歌などからほんの少し神様を感じ、また結婚後は主人の母が英和高校の出身でしたので、何かあっても明るく対処していた態度は、今思うと聖神的だったといえる位でした。

ご近所のクリスチャンの方の家庭集會に時々参加したこともありましたが、熱心ではありませんでした。

私が教会へ足を運び、聖書を学ぶようになりましたきっかけは、当時筑波大学の学生だった娘の、間違つた信仰団体である統一協会からの救出でした。この団体は、文鮮明という韓国人を教祖とし、自ら「私は再臨主であり、キリストの使命を受け継いだ者だ」と言い、キリスト教に基づいた活動していると若者を集め、「為に生きる」をキャッチフレーズにしていました。

信者は共同生活をし「原理講論」という、聖書を勝手に解釈して作り上げた理論の勉強を毎日毎日繰り返していました。「キリスト教の一派である」と言いながら、ちよつとではわからないようにならざるに替えられた学びによって、だんだんイエス様が文鮮明に変わっていききました。

今の社会では人は幸せになれない。皆が幸せになるには地上に天国を作ることが必要で、そのためには、人をだまして「天に宝を積むことが使命である」といって、不当なやり方で印鑑や壺を売りつけたり、また、難民救済のボランティアと偽って募金集めをするなど、常識では考えられない思想を持つようになっていきます。信者は親のため、先祖のため、国のためと、学業も職業までも捨てて奉仕の生活をしているのです。

私たち夫婦は、世間でこの団体が騒がれていたにもかかわらず、子供がそこに入っていることにはまったく気がつきませんでした。

今思いますと、不思議な偶然が重なり、主人の都留高校時代の教え子のひとりが「大変なことです」と、子供が入信していること、これは恐ろしい団体であることを教えてくれました。そして、当時異端ことに統一協会からの救出活動を行っていた荻窪栄光教会の森山牧師を探し出してくれました。彼の家がその教会に近かつたこともあつて熱心に通い、沢山の関係する資料や本などすべて送ってくれました。この人は娘が小さい頃からずっと可

愛がつてくれていて「結婚式で祝辞を言うのが楽しみ」と言ってくれていた人です。

はじめは二人とも事の重大さが分からず、戸惑うばかりでしたが、森山牧師を訪ね、お話を聞くうちに大いに驚き「どうしてそんなところに入ってしまったのだろう」と目の前が真っ暗になり、大分落ち込みました。でも、子供を救うためには統一協会の理論や実態などをよく知ること、それと共にキリスト教の本当の精神をしっかり理解することが必要だと分りました。そのためには、森山牧師のおられる教会に通つて勉強を続けてゆく他はないとやつと分かり、心を決めました。その時はまだ、信仰を持つことまでは考えが及びませんでした。

その後、日曜ごとに二人で中央道を往復し、この教会の礼拝に出席して説教を聞き、いろいろな集まりにも参加して教会員の方々とも交流を深めていきました。また同じ悩みを持つ父母と互いに励まし合いました。日本の全地域・北海道から四国・九州までの方々と知り合いになり、涙を流しながら祈りました。

しばらくして、森山牧師のはからいで子供との話し合いの機会が与えられ、一週間ほど私たちも教会で共に生活しながら説教を続けましたが、結局、約束の時間切れで失敗に終わり子供は帰ってしまいました。この時、子供は筑波大学の四年生で、その年には論文が間に合わず卒業できませんでした。その後、心を痛めた私は、家に帰つてからは食事も出来ず、外にも出ないで座敷に寝て、繰り返し森山牧師との問答を続けて子供のことを一心に思っていました。

「そっだよ」と「それは違うよ」という牧師の声を聞きながら、今までの自分のすべてをさらけ出して祈り続け、一週間くらい経ってしまいました。私自身は真剣でしたが、主人と息子は半分困ったことになったと思つていたようです。医者と呼んだりして、結局病院に入りましたが、今思い返しますと、私の今までの罪のすべてをそこで吐き出し、神様に赦しを乞うていたのではないのでしょうか。血圧も大分下がってしまい、あの時、死に至らなかったのが不思議な位と今では思います。

しばらくして元氣を取り戻し、普通の生活が出来るようになり、以前より力が湧いてきました。この当時、た

またま森山牧師と鈴木顕栄先生のお母様が親しい関係にあったことをお聞きし、早速鈴木先生をお訪ねして、すべてをお話ししました。あたたかく迎え入れてくださり、木曜日(の)の聖研祈祷会に参加を許され、旧約の勉強をさせていただきました。最初はよく理解できませんでしたが、神様の厳しさと愛の深さを知り、敬虔な気持ちになりました。その当時出席されていた皆様の励まし(の)の言葉は、どんなに力となり有難く思えたか分かりません。

何とか日々聖書を開き、説教に接し、祈りを重ねるうちに、だんだんと自分の考え方や生活態度、子供への愛のかけ方など、さまざまなことが浮き彫りになり、今まで何と多くの罪を犯してきたことかと気付かされました。このような私でも、主は、  
主のいつくしみは絶えることがなく、そのあわれみは尽きることがない。  
(哀歌三章二節／口語訳)

と言ってくださいました。そして、

あなたの道を主にゆだねよ。  
(詩篇三七編五節／口語訳)  
との、力強い御言葉により、イエス様を救い主と信じ、すべてをゆだね、おすがりしてゆく他はないと信じて歩んで行こうと決心しました。私のような者でも、主は何の代償もなく、その御手の中に入れてくださり、十字架の贖いによって私の罪を赦し、大きな愛で包んでくださることを実感しました。教会に通い始めて二年後、森山牧師より洗礼を受けました。

受洗により、大きな平安が与えられ、大分落ち着きました。それまでは「この後、どうなるのだろう」とか「子供は本当に救われるだろうか」などと考えて、夜もぐっすり眠れず、何かにつけ涙ばかり流していましたが、  
恐れてはならない、わたしはあなたと共にいる。

(イザヤ書四一章十節／口語訳)  
との御言葉通り、主がいつも近くにいて力づけてくださるとの確信が生まれ、少しずつ明るくなりました。また、この苦しみは主の試練であり、耐え忍ぶことによって必ず救ってくださいされると信じられるようになり、祈りを深めました。

以前より元気になり、ひとりで筑波に行つて娘と話したり、突然行方不明になった子供を探して訪ねまわつたり、やっと見つけて共同生活をしていた京都へ何回も

通つたり、統一協会の幹部を訪ねて訴えたり等々、他のことは考えず、私たちのできることをしました。

救出の予定ができた一年程前は、東京に小さな部屋を借りて、金曜日(の)から日曜日(の)まで一人で泊まり、礼拝や集会に出席したり、救出の手伝いをしたり、救われた子供達を呼んで寝食を共にしながら心の奥を聞いたりもしました。もともとあまり強くない体でしたが、色々な場面で何度も主が働いてくださり、

わたしの力は弱いところに完全にあらわれる。

(コリント人への第二の手紙十二章九節／口語訳)  
の御言葉通り、思いもよらない有り難い経験をたくさんしました。「子供の魂の救い」を第一の目標とし、主を信じて二人で祈っていたことを、主はご存知だったのでしよう。一度目の話し合いから四年後、やっと待ちに待った話し合いの機会が与えられました。借りていた部屋に私たち両親、親戚の方、牧師、救われた子供やその親たちが次々に来て、説得したり聖書を読んだりして過ぎました。子供の統一協会入りをきっかけに、その後も多くの救出に携わってくれている主人の教え子の方は毎日、またおじさん、おばさん、いとこ達も来てくれて、子供の救いのために誰もが一生懸命でした。

やっと理論の間違いが分るまで二ヶ月半程かかりましたが、そこでの子供の様子は、洗脳による人格破壊が随所で見られ、なかでも傲慢な態度は親として本当に悲しい位でした。また「断食の行」といつて、五日間位一切食事、水もとらず、冷水を体にかけては祈りを続けるのを見た時、体を傷めることによって救われるという、今思うとオウムに似たキリスト教とは似ても似つかない恐ろしい宗教であることがよく分りました。

その間どうしていいか、気がなくなりそうな時もありましたが、

あなたがたは恐れてはならない。かたく立って、主がきよつ、あなたがたのためになされる救を見なさい。…主があなたがたのために戦われるから、あなたがたは黙していなさい」

(出エジプト記十四章十三〜十四節／口語訳)  
という御言葉によって力づけられ、「主よ、信じます」と心から祈りました。この時、夫と二人で祈れることの幸せをかみしめながら、祈り合うのみの日々でした。

前に救われた子供たちも「必ず救われます」と力強く励ましてくれ、私も救われるのは何時になるか分らないけれど、生命ある限り、この娘の魂が元に戻るまでここで頑張ろう「主よ、みこころをなしたまえ」と、娘の寝顔を見ながら毎晩祈りました。二ヶ月半の間、何度か挫折しそうになりましたが、何とか平安な気持ちで過ごせたのは、信仰が与えられ、救いを確信し、希望をもってじつと耐えて待つことができたからだと思います。

やっと娘の「今までごめんさい。止めます」という声を聞いた時は、「これは主がなしてくださつたのだ」と思い、深く感謝しました。

また、救われるまで長くかかったのは、私たちに對して主が試練の時を与え、一番大切なものは何かとはつきり分るまで、子供を頑張らせたのではないかと思ひました。

その時、夫は「一生、ダメかもしれないと思つていた。救われたのは奇跡だ」と言っていました。信仰を持つようになった今では、夫は、そうは言わず、主の大きな御愛によると確信できることでしょう。

救われた後も、子供の精神状態は不安定で色々ありましたが、今は元気で何とか普通の生活をしています。まだ多くの子供や親が同じ苦しみをもって戦っています。今も東京の集会に参加し、お話を聞く度に心が痛みます。

この経験を通して多くのものを戴きました。経済的には最後に残つたのは土地と家のみで、今までの貯えは全て使い果たしてしまいました。

無理を続けていたので、体も大分損なわれ、元に戻るのに長がかかりました。

でも、大きな戴きものは、夫と共に信仰が与えられたことです。

神は苦しむ者をその苦しみによって救い、／彼らの耳を逆境によって開かれる。

(ヨブ記三十六章十五節／口語訳)  
の御言葉通り、この苦しみがなかったら、主の大きな御愛も分らず、人間の愚かな思いの中で暗い日々を送っていたことでしょう。子供との関係も心と心で話し合えるようには、到底なれなかつたと思ひます。  
この苦しみがあつたからこそ、主の御言葉が深く心に

響いたのではないでしょうが、主のお支えにより、やっとここまで歩んで来ましたが、今からも試練が与えられるでしょう。この経験を忘れず「みこころのままに」と祈りを深め、主よりの平安に感謝して、恵みを数えながら生活したいと思います。今までの皆様のお祈りと暖かい励ましに感謝して、終わりとさせていただきます。

2008年8月28日 祈祷会

証詞

## 地上では旅人であり 寄留者である



清藤 和子

この人たちは皆、信仰を抱いて死にました。約束されたものを手に入れませんでしたが、はるかにそれを見て喜びの声をあげ、自分たちが地上ではよそ者であり、仮住まいの者であることを公に言い表したのです。

(ヘブライ人への手紙十一章十三節)

97、89、88、72、69、73、92、93、74、88、87、51、この数字何だかお分かりでしょうか？ そうです、ある日の新聞のお悔やみ欄に出ていた死亡時の年齢です。高齢なのは仕方ありません。なにしろ、八月一日に発表された平成十九年の平均寿命は男子七九・一九歳、女子が八五・九九歳。長寿国日本の現状だからです。まれに少ない数字を見つけると、どうして死んじやったんだらう、何の病気だったんだらうとその人の死について想像してしまいます。まだ幼いのに：私より若いのに：私の子供より若いのに：私も死んでも良い年齢なんだ：とか考えてしまいます。

私は昔から、かなり若いときからお悔やみ欄を見るのが癖になっていました。何故なのか理由は自分でも良くわかりません。が、自分が関わった患者さんの死亡欄を見つけることから始まったかもしれません。そのうち私の方が長生きできたと比較している自分がありました。そこにはただ単純に長く生きていることにのみ価値を置き、その生き方の質を見ようとしていません。勿論お悔やみ欄でその人の生き方が分かるわけはありません。きっと死が怖いのでしょう。いつかそこに自分の名前が載るといふ漠然とした不安。皆誰もが死んでいくという分切り切った事実を再確認したいだけなのではないのかとも思います。

聖書で、牧師の説教で私たちはどれほど死について教えられてきたでしょう。死は怖いものではない、私たちは永遠の命が与えられていると。

仕事の関係上、多く人の死と関わってきました。看護に携わった三十数年の間には、社会において死に対しての考え方に変化が見られました。以前、死は患者さん自身のものではなく、他者例えば家族・医療者のものだったように思えます。病気によっては、その人の病名や病状を苦勞して誤魔化し、ましてや余命や死について伝えることもありませんでした。家族からは真実を伝えたいと欲しいと家族の願いが優先であり、医師も看護師も「本人には、このような病名で伝えてある」と嘘を統一しようとして必死でした。一昔前はそんな医療がまかり通っていました。しかし、患者さん自身から自分の死について、余命について知りたいとの希求が強くなりました。医療者側にも変化が起こりました。今ではきちんと告知しますし、場合によってはかなりシビアなところまで言う医師もいるようです。しかし、言い放しでフォロー出来ない現状も多くあります。

私の場合も、小脳萎縮症という病を得ていた母が、晩年胃癌と診断されたときに、私は看護職という専門職にありながら、母に告知することなく誤魔化して来ました。手術をしたら更に歩けなくなるのではないか、私が母に掛かりきりになり仕事が出来なくなるのではないか、手術によってもっと寿命が短くなるのではないか等の理由で：本人抜きで私本位の治療方針を決めました。

胃潰瘍という嘘の病名を告げて保存療法。この決断は本人に余計な悩みを与えないという一点では正しかったかもしれない。しかし、母を信じ正直に伝えていたら母の最期はもっと豊かな人生を送ることが出来たかもしれないと悔いております。

死から二一年経った今頃、何故こんなことを振り返るのか？ 改めてそのことを考えさせられる切っ掛けになったことがあるからです。

主人の高校時代からの親友が函館に居ります。今では居りましたにあってしまいました。彼は主人を信仰に導いてくれた友でもあります。その彼が二年前の二月、切羽詰まった様子で「胃がんと手術を受けた。余命一年と宣告された」。まさか一年なんてあり得ない：何の根拠もなく電話を受け取った私の感想でした。私たちにできることは祈ることしかない。出来るだけ励まし、訪問しようと思いましたが、祈りが始まりました。

術後、抗がん剤の点滴と内服が始まりました。倦怠感、顔面・手指の色素沈着、痺れ感、食欲不振等の副作用に耐えて、数ヶ月間治療を続けていきましたが、抗がん剤の副作用は想像を絶したようです。彼には、この苦しい副作用を受け入れてまでも行う治療の効果を見極めたとき、残された生をもっと人間らしく質の高いものとして生きていくことを決断しようです。

その秋には我が家へも訪ねてくれて食事を共に致しました。胃の全摘をしていましたから食は細く、一回に食べられる量は少ないものでした。数時間の滞在でしたが、二人は本当に楽しそうに語らっていました。浜松にいた大学時代の友人宅を回って最後の挨拶の旅だったと思います。今後の生き方を自分で決めた彼の表情は爽やかでした。

術後一年、脊椎に転移。病気を受容しつつ奥さんと毎日を大切にしながら過ごし、同時に死の迎え方についても話し合っておられました。この話し合いの中心に「エターナル ライフ ノート」がありました。これは「永遠の命ノート」と言うことです。

ここで「エターナル ライフ ノート」を紹介したいと思います。

彼の所属する函館千歳教会の婦人会では、高齢者生活

支援を目的とした「みぎわ会」を設立して活動していましたが、昨年牧師と彼の奥さんを中心として「エターナルライフ ノート」を作成しました。遺される人への配慮を含め、キリスト者として自分の死にどのように備えていくかということをもとめるためのノートです。

項目には、私の経歴、信仰歴、思い出、愛する人たちへ、介護・看護についての希望、葬儀についての希望、財産目録、交友録などの大項目があり、更に四六の小項目でまとめられます。介護・看護については病名告知、延命治療、ホスピスケア、臓器移植、献体についての項目があります。葬儀については葬儀の方法、喪主になって欲しい人、聖書の箇所、賛美歌、弔辞をお願いしたい方、記念会等についての項目があります。

二月に入って食事が摂れなくなり体力も落ちたことで、ホスピス病院に入院したことを知りました。点滴で麻薬の注入がされトトロ口してはいましたが痛みは抑えられていました。携帯電話にも出ることができ、主人に弔辞を読んでほしいとの依頼がありました。私たちはあまり長く感じ、最後のお別れになるかもしれないと足を運んだのは三月二十九日でした。この頃は、誰にも会いたくないと言っていたようです。入院先の病院の名前も定かでない突然の訪問でしたが、外泊が出来、家に帰っておられました。一時間ほどお邪魔しました。衰弱し、ともすると眠りに入る傾向が見られましたが、主人と昔話に花を咲かせ、またホスピスでの様子を朗らかに話してくれました。「自分はもう駄目なんだ、長くはない」と思われたのは、急にやさしくなった看護師の態度だったと語っていました。看護師として思い当たる節がありました。皆そんな風に感じていたのだらうかと、遅すぎましたが改めて考えさせられました。丁度その時は、奥さんと共に「エターナルライフ ノート」を埋め込む作業をしていました。死亡広告をどのような形にするか、ということでした。薬局を経営していましたので、大切な事だったでしょう。奥様は始終傍にいて微笑みながら聞いておられました。後で奥様が書き込んで行くことと決まりました。前回十二月に訪ねた時は四人で共に礼拝を守ることが出来ましたが、この時は私たち二人の寂しいものでした。礼拝後、再度訪問し奥様の手料理を

頂きました。ベッドで横になったきりの彼が、テーブルに向かい共に食事を致しました。彼は殆ど口にする事ができませんでしたが、ご希望の西瓜を口にしています。私たちが美味しいと喜んで食べているのを嬉しそうに見ていました。彼をホスピス病院に送り届け、帰路に着いた、この世での最後の別れでした。それから一ヶ月後、四月二十九日に召されました。主人は約束どおり弔辞を読ませていただきました。

この二年二ヶ月、私たちは彼の闘病生活と死へ向かう姿勢から多くのものを学びました。余命一年と宣告された病を受け入れ、生活の質を高める生き方を主体とした治療方針を自分で決めました。死の迎え方も信念を貫き誰にも左右されることなく決断し、夫婦で残りの人生を一日一日大切に語り合い過ごし、「エターナルライフ ノート」を埋める作業を丁寧に行っていました。奥様が中心となって作成したノートを最初に使用されたのが、その奥様自身でした。

六二歳でした。決して長生きではありません。家族にとつて、親しい人にとつては、何故こんなに早く？と思わざるを得ません。この世での辛い別れとなりました。私たちにしても同様です。が「死なないことが幸いなことか？ 地上が安住の地ではない、神の御許こそ安住の地である」と四月二〇日の説教で語られ、また先日の説教では「死は通過点ではない」と言われました。まさに彼は安住の地に凱旋し、今、神との直接の交わりをしていると確信いたします。それを思う時、平安な気持ちになれます。

彼は最後まで、家族のこと、商売のことを心配しておりましたが、私たちの知る限り死に対する恐怖は一言も言っておりませんでした。信仰を持って死を迎えるということは、こういうことなのかと教えられました。

先ほど読んでいただいた聖書、ヘブル書十一章十三節をもう一度、口語訳で読ませて頂き、終わりにしたいと思います。

これらの人はみな、信仰をいだいて死んだ。まだ約束のものは受けていなかったが、はるかにそれを望み見て喜び、そして、地上では旅人であり寄留者であることを、自ら言いあらわした。

2008年10月23日 祈祷会

証詞

## 主の計画に従う



平塚 浜子

人が労苦してみたところで何にならう。わたしは、神が人の子らにお与えになった務めを見極めた。神はすべてを時宜にかなうように造り、また、永遠を思う心を人に与えられる。それでもなお、神のなさる業を始めから終りまで見極めることは許されていない。

(コヘレトの言葉第三章九節〜十一節)

私がキリスト教に導かれたのは、主人との出会いでした。私の生まれたところは茨城県土浦市で、日本で三番目に大きい湖・霞ヶ浦が目前にあつて、後方には筑波山を望む関東平野の閑静な町です。実家は大きな専業農家で稲作と蓮根栽培をしていました。朝早くから日が暮れるまで仕事づくめの生活です。そんな中に育った私は、全く違った世界に憧れました。

高校二年の時です、当時は今ほど電話が発達していませんでしたので、文通が流行していました。友達が文通相手を雑誌に掲載したところ、百通余りの応募者がありました。その内の十通を私に紹介してくれました。そして、その中の一通が山梨からの応募で、美しい自然と果物が美味しいと書かれているのに魅せられて文通を始めました。

最初は主人の妹の喜代美さんでしたが、いつの間にか主人にかわってしまいました。私は特別のためらいもなく続けていました。高校を卒業してからも更に文通は続けられ、三年の歳月が経ちました。

一九六九年十一月二三日、私たちは愛宕町教会で鈴木顕栄牧師の司式の下で結婚式を挙げました。甲府の山宮町に所帯を持ったのですが、聖書も讃美歌もお祈りも全く分からない私がクリスチャンホームに嫁いだのですから、不安でいっぱいでした。今ほどの交通の便利さはありませんでしたから、茨城と山梨は遠い距離でした。そんな遠い地の人と文通によって結ばれたのは神様の計画であったように思えてなりません。思い返せば不思議な事ばかり沢山ありました。

私の不安な気持ちが届いたのか、主人の母と姉妹が何時も労わってくれました。また鈴木牧師始め教会の皆さんの暖かい心遣いと讃美歌の美しさに、今までにない安らぎと勇気を心に感じました。翌年五月二五日、神様に全てを委ねて洗礼を受けました。主人の仕事は県外への出張が多かったので、右も左も全く分からない地に嫁いで来た私にとっては、教会生活が何よりも心の支えになりました。私のような小さき者を見出して下さった神様に感謝の気持ちでいっぱいです。

しかし、平安の時ばかりではありませんでした。一九七一年十二月のことです。夜中に突然の吐き気と激痛が私の体を襲い、とても我慢ができなくなって、主人を起こして病院に連れて行ってくれるよう頼みました。けれども夜中のことで、当時は電話のある家庭は少なかったのです。外の電話ボックスに行って病院をさがしたようですが、なかなか主人は戻ってきませんでした。私は、もう意識が朦朧としてどうすることもできませんでした。夜明け間近になり、やっと主人が戻って来て、受け入れてくれる病院が見つかったと言って長女の恵美子を羽黒に住んでいる知人の家に預けて、私を車に乗せ病院に連れて行ってくれました。医師が診断した結果、大至急手術をしないと命に関わるとのことです。早々手術室に運ばれ手術を受けました。慢性盲腸炎が化膿して急性腹膜炎を起こしてしまっただけで済んだ。手術後、お腹から取り出した膿が一升瓶にいっぱい入っているのを見せられて驚きました。あの時、もし主人が仕事で県外へ出張していて留守だったらどうなっていたでしょう。想像すると恐ろしくなりました。きっと神様が守っていて下さったに違いないと思いました。

ベットの所で身動きできない状態でしたので、子供の世話をする母にお願いしました。しかし体の弱い母でしたので、疲れはしないかしら、風邪をひかないかしら等々心配が募り、ただただ神様に守ってくださいと祈るばかりの私でした。入院から三週間が過ぎて、やっと体も動かせるようになり、聖書を開きました。

心を騒がせるな。神を信じなさい。そして、わたしをも信じなさい。

(ヨハネによる福音書第十四章一節)

その御言葉が目にとまり、何回も何回も読み返しました。その御言葉によつて本当に強められました。そして、三浦綾子さんの著書も何冊か夢中で読み、心が癒されました。受洗して間もない信仰の浅い私をも、神様は覚えて守っていてくださったのでした。

クリスマスもベツトで過ごし、年も明けて一月の末、無事退院することができました。二ヶ月間の入院生活の中を、教会の皆様にはお祈りと励ましを寄せ書きを贈っていたいただき、本当に感謝でいっぱいでした。「苦難をも喜べ」と聖書に記されているとおり、私の信仰を深めるための神様の業だったのでしよう。

年月の過ぎるのは早いものです。あれからもう三十七年が経ってしまいました。思い返せば様々なことがありましたが、神様は何時も共にいてくださって、弱い私を守り、大きな愛で包み、豊かな恵みを与えてくださり、行く道をも必ず開いてくださいました。神様に心から感謝します。

そして、私たちを信仰の道へと導いてくださったのは、今は亡き主人の母の熱心な祈りがあってこそです。これからも全てを神様に委ね、信仰生活を歩んで行きたいと思えます。



2008年12月25日 祈祷会

証詞

## 恵みの数々



有泉美津子

主において常に喜びなさい。重ねて言います。喜びなさい。あなたがたの広い心がすべての人に知られるようになさい。主はすぐ近くにおられます。どんなことでも、思い煩うのはやめなさい。何事につけ、感謝を込めて祈りと願いをささげ、求めているものを神に打ち明けなさい。そうすれば、あらゆる人知を超える神の平和が、あなたがたの心と考えとをキリスト・イエスによって守るでしょう。

(フィリピの信徒への手紙四章四〜七節)

信徒立証はまだまだ遠い先のことと思っていました。が、ふと気が付くと目前に迫っていました。

数えてみれば受洗して二八年も経つというのに、証しするべきことも思いつかないとは、いったいどのような二八年間だったのだろうか、不信仰に情けない思いでした。

アドベントを迎え、クリスマスの飾りなどしながら、クリスマスへの恵みについて思いをめぐらせば、この大なる驚くべき恵みにひざまずくばかりです。

そして改めて振り返ってみれば、この二八年間なんとたくさん恵みをいただいた日々だったことかと感謝でいっぱいになりました。

二九年前のちょうど今ごろのことでした。結婚生活は行き詰まっていた、進むことも、戻ることもできず、がんじがらめになっていた時、目に入ってきたのが、御言葉の日めくりカレンダーにかかれていた、

…神は真実なればなんじらを耐え忍ぶあたわざるほどの試験にあわせ給わず…

(コリントの信徒への手紙一十章十三節/文語訳) という御言葉でした。「耐えられないような試験にあわせることはない? …何が何でも耐えなさいということなのか?」「どうすればいいんだ」と、ますます分からなくなりました。

鈴木先生より結婚式を挙げていただいたのですが、その後、ほとんど教会に行くことはありませんでした。が、この御言葉に促されるように「そうだ! 教会に行こう」と思い、やっと一歩動き出すことができました。今思えば、これこそ神様の導きだったと思います。

一年間の求道期間中、厳しい時でしたが、鈴木先生・節子先生はじめ教会の方々に支えられ、また、後で知ったことですが見ず知らずの他教会の方々も祈ってください、何より神様のあわれみにより一九八〇年十二月二一日、クリスマス礼拝において受洗の恵みにあずかることができました。

その後、仕事をするようになってからは、持病の偏頭痛が悪化し、休日は寝込むことが多く、礼拝出席も思うようでなかったのですが、教会の方々に励まされ、支えられ、教会につながっていることができました。まだ幼かった子どもたちを、母子家庭という小さい中で孤立させたくないという気持ちがあったので、CSで大勢の友達や先生方の中で育てていただくことができ、何よりでした。息子は、高校卒業のときに洗礼を受けて大学へ出発しました。大きな喜びであり恵みでした。

精神的に、経済的に困難の時に、折にかなって、御言葉が与えられ、いろいろな形で助け手を送ってくださいました。先ほど読んでいただいたフリーペーパーにあるように、人知で計り知れない、ほんとうに驚くべき恵みの数々です。

四〇五年前からは、急ブレーキがかかったように体調不良に悩まされ、又この時期に母の病状も悪化し、仕事の責任も増し、あらたな試験の時でした。

母は三年余りの闘病の末、今年の一月に亡くなりました。体調のほうは、なかなかかんばしくないとため、仕事は

これからの予定 …… 奮ってご参加・ご協力・ご加禱ください。

★ 9月26日(土)・27日(日) 教会全体研修会 《山梨分区伝道部主催講演会と合同》

講師/竹澤知代志 先生(玉川教会牧師)

26日《午後》 講演/「伝道」-プロテスタント日本伝道150年

27日《午前》 主日礼拝/

プロテスタント日本伝道150年を覚えて、「伝道」をテーマに講演していただきます。

★ 10月25日(日)午前11時30分~ 第27回 教会バザー

今年は都合により第4週の開催となりましたので、お間違えなく、その予定でご準備ください。

★ 9月19日(土)午前10時00分~ 山梨分区 婦人部大会 《於:甲府教会》

今年は愛宕町教会がホスト教会です。婦人会だけでなく、教会員の皆様のご協力をお願いいたします。

なお、講師は、日本基督教団議長の山北宣久先生(聖ヶ丘教会牧師)です。

★ 11月22日(日)午後 6時00分~ 日本伝道150年記念 信徒大会 《於:東京山手教会》

★ 11月23日(祝)午前10時00分~ 日本伝道150年 記念式典 《於:青山学院大学講堂》

今年はプロテスタント日本伝道 150 年を記念する年です。22 日の日本基督教団東京教区信徒会主催「信徒大会」、23 日の日本基督教団主催「記念式典」への出席を、壮年会で計画しています。

壮年以外にも参加をご希望の方は、壮年会長(古屋秀樹)までお申し出ください。

九月で辞め、今までできなかった子どもの世話を焼いたりしながら体調回復に努めています。今までは時間がなく母親らしいことができなかつたので、これも楽しい恵みです。  
この三〇年近くを振り返ってみて思うことは、負(マイナス)と思われれることの原因は自分自身の傲慢さにあつたと思います。虚勢を張って立っていないと、転んでしまいそうな不安定な生活の中で、本当は何もできない小さき者を神様は丸ごと受け入れてくださり、家族や友人、衣・食・住など必要を備えてくださいました。この大きな恵みにただただ感謝です。

最後に子どもたちについてですが……息子は先に述べましたように受洗はしたものの、教会生活は行っていません。また屋久島の家や仕事場のちかくに教会も見つかりません。娘のほうは、中学時代からほとんど教会に来ることはなくなりました。  
しかし英和学院で六年間学んでいたにもかかわらず、教会に行ったことすらなかった傲慢極まりない私にも神様は思わぬところで道を示してくださいましたように、子どもたちにも必ず道を備えていくべきことと信じます。どうか子どもたちに信仰が与えられますようにお祈りください。

## 2008年度夏期伝道実習報告

## 恵み

東京神学大学大学院1年

須賀 工



この夏、愛宕町教会へと導かれ、皆様に祈りと共に支えられながら夏期伝道実習を行えたことを、心から感謝いたします。本当に、皆様の祈り、そして背後での配慮なしには、この実習はなしえなかったことを思います。自分が沢山の方々に支えられていることを深く思い起こすことが出来たのは、ただただ、皆様によるものであったと思います。心から感謝します。

特に家庭集会の場が与えられたことに感謝です。皆様と共に御言葉に触れ、御言葉にある豊かな神の恵みを共に共有できたこと、そして、これは家庭集会だけでなく、祈禱会においてでもそうですが、皆様の素直な批評や意見は、自分自身にとって大きな恵みであったと思います。自分がいかに、物事をきちんと明確に考えていないか、自分勝手な理解だけに頼っていたか、そのことが、ただただ身に沁みるものでありました。「このままでは、いけない」という危機感を深く感じるものでもあったと思います。それはただただ恵みであり、私にとって、伝道者に向かっての大きな自覚を促すものであったと言えます。

家庭集会を通して、沢山の指導が与えられました。しかし、それらを全て集約するならば、「御言葉に聴く姿勢」であります。自分には、特にこのことが足りなかった。いかに「学んだ」ことだけに頼ろうとしていたか、それを痛いほど知る時が与えられたように思います。

それは同時に、自分がいかに「御言葉の恵みを聴きこぼしていた」ということでしかない。私はこの家庭集会を通して、信仰者としての自分自身の姿勢が問われたように思います。同時に、聖書に示される一つ一つの言葉、その何気ないたった一つの言葉がいかに恵みに満ち溢れているか、そのことを深く感じる事が出来、この実習が、正に神様の恵みによって与えられていたのだということを思わずにはられません。

確かに、北牧師の指導は怖かった。しかしそれ以上に、指導に対する真剣さを感じる。教えられた一つ一つが（北先生に言わせれば、まだ足りないそうですが）、どれほど牧師として大切なことであるか、このことを痛感した思いであります。そして、その全ては、私にとって大きな恵みに他なりません。

家庭集会以外にも、北先生を通して沢山のことを学ぶ機会が与えられました。普段、考えることも学ぶこともない、様々なことを知ることが出来たと思います。そして一段と、自分自身が伝道者として、神の前に立たされていることの責任と幸いを深く感じずにはいられなかったです。

全てを書き記すことは出来ませんが、特に心に残ったことは、「牧者は、知る者」でなければならないと

いうことであります。教会員一人一人を知り、その地域を知り、過去・現在・未来の時代を知ろうとする姿勢、この大切なことが最も心打つものでありました。教会員を知ることによって責任をもって人と関わることの大切さ、地域を知ることによって伝道の戦略を考える大切さ、時代を知ることによって時代の中にある教会のこれからを見通す大切さ、そのことは、真剣に伝道をなすことの中で欠けてはいけないことであると考えさせられました。自分が一年半で伝道者として現場に立たされることを思いながら、今このような大切なことに触れ、学ぶ時が与えられたのは、本当に喜びであると感じています。これは学んだことの一つではありますが、他のことも含め、ここで与えられた恵みを、今度は自分自身が活かし用いていければと思います。

愛宕町教会での実習を通して、様々な経験、そして出会いが与えられたことも、本当に恵みであると思います。本当に、この教会は交わりを豊かにし、一人一人が教会に奉仕をなし、祈りを欠くことなく、配慮することを欠かさない、そんな教会であると思いました。それは、教会員の人達がどれだけ教会を思い、人のことを思い、伝道に熱いか、ということだと言えます。そして、そのような輪の中に自分のような者が受け入れられたことは、本当に喜びでありますし、交わりが与えられたことは恵みです。子ども達は明るく遊んでくれたし、信徒の一人一人の方々も、励ましの言葉を沢山かけてくださった。そのことは、ただただ、私にとって大きな力となりました。本当に感謝の心で一杯であります。

この実習から、私は、自分自身の至らなさを深く思い、自分自身が情けなくなるぐらい落ち込んだ時もあります。自分は本当に駄目だなと思った時は何度もあった。けれど、そのお陰で、聖書に向き合う時、御言葉と格闘する時は、正に神様による恵みを知る時であることを、実習の全体を通して味わうことが出来ました。本当に沢山の聖書の箇所に触れました。今までにないぐらい沢山の聖書箇所に取り組んだ。そして、今までにないぐらい短期間で、何度も落ち込んだ。けれど、沢山の御言葉に触れながら、心は喜びに満たされています。このことを思う時、やはり自分は愛宕町教会で実習が出来たことが本当に良かったと思えますし、本当に神様に対して感謝しています。

「本当に」忙しい中、御指導して下さった北先生をはじめ、配慮して下さったその御家族の皆様、そして、温かく励まして下さった教会に繋がる一人一人の皆様、沢山遊んでくれたCSの子ども達、ありがとうございました。これからの歩みが祝福の内にありますよう、お祈りしています。